

タイトル	<論説>試論：ガーナ・コブリソ村における「原体験」の客観的普遍性の論証にむけて
著者	細見，真也
引用	季刊北海学園大学経済論集，51(1)：1-14
発行日	2003-06-30

《論説》

試論：ガーナ・コブリソ村における「原体験」の客観的普遍性の論証にむけて

細 見 眞 也

はじめに

私は、ガーナのコブリソという名の村において1962年に遭遇した「原体験」に触発されて、そのご今日までコブリソ村の人びとはどのような人間観を持っているのかという問題を中心にすえて、彼らの価値観を構成する自然観、社会観、言語観などを考察してきました。そして、コブリソ村の人びとのあいだには「人間というものは、無意識のうちに過ちや間違いを犯しやすい弱い存在なのだ」という人間観が共有されてきたのではないかと、という暫定的な結論を発表してきました^(註1)。

しかし、私が拙稿（2001）において指摘した人間観は、1962年の11月という時点でガーナ南部のコブリソ村において、文字どおり偶然に発生した出来事（私の言う「原体験」）にもとづいて私が推論によって導き出した人間観であり、その出来事は事実には違いありませんが、時間的にも空間的にも非常に限定された特殊な経験ですから、その推論がアフリカ人すべてに共通する普遍的な人間観であることを示す客観的な論拠に欠けていることを認めざるを得ません。

その意味において、私が指摘した人間観は、あくまで、ひとつの仮説に過ぎないのですが、それは客観的事実にもとづいた推論ではありませんから、普遍性が欠如しており、科学的な仮説であるなどとは言えません^(註2)。

そこで、本稿では、この「原体験」そのものが客観的事実であると言えるか否かを検討することを通して、私の推論した人間観がコブリソ村の住民だけでなく、私たちすべてにも該当する普遍性をもったものであることを論証するための一助にしたい、と思います。

ところで、私の「原体験」が客観的事実であることを論証するために必要なことは、この経験のどこが主観的なものであり、どこが客観的普遍性を欠いているのかを明らかにすることから始めなければなりません。

そこで最初に、この「原体験」を構成する出来事のなかで主観的なものは何であったのかを探しますと、そのひとつは、当時コブリソ村の村長代理であったコフィ氏から質問を受けたときに私が感じた「強烈なショック」という感覚（知覚）であることがわかります。

なぜかと言いますと、例えば、複数の人間が同じ地震を経験したとしても、ある人は気持ちが動転してしまって身体がまったく動かないほど強烈なショックを受ける場合があるかと思えば、別の人には、比較的冷静に落ち着いて避難行動が出来る場合があるというように、経験とか体験は同じであっても、その経験から受けたり感じるショックの程度には大なり小なりの違いがあると、考えられるからです^(註3)。

そのように、経験や体験によって感じるショックの程度に個人差があるとしても、ある経験が「私にとって強烈なショックであった」と言いましても、それはあくまで個別特殊な経験であり、人間であれば誰でも、いついかなる場合でも必ず強烈なショックを感じるなどとは言えないのです。その意味で、私が感じた「強烈なショック」という感覚や知覚は、あくまで主観的なものであり、普遍性を欠いていると言わざるを得ないのです。

さらに、この「原体験」には客観的事実であることを論証しなければならない主観的な事実があります。それは、私が「強烈なショック」を感じる原因となったコフィ氏の「質問」そのものが客観的事実であったと言えるか否かという問題です。コフィ氏の質問によって、私が「強烈なショック」を受けたのは確かに経験的事実ではありますが、その質問が事実としておこなわれたという客観的な論拠やコフィ氏が質問しなければならなかった必然性を示さなければ、私の言う「原体験」そのものが根拠のない空理空論にすぎなくなるからです。

このような考えにもとづいて、本稿では、次のような問題に焦点を当てて、検討したいと思います。そのひとつは、コフィ氏の質問によって私が受けた「強烈なショック」が一定の条件を共有している人間であれば誰もが感じるショックであり、客観的な普遍性をもっているのではないか、という問題です。また、コフィ氏と同じような状況に置かれた人間であれば、コフィ氏に限らず誰もが「あのような質問をせざるを得なかった」のではないか、という必然性の問題です。

(注1) 細見眞也稿「発展途上国の研究と人間観について：ガーナの農民から教えられたこと」(『北海学園大学経済論集』第48巻 第3・4号, 2001年3月, p.28)

なお、本稿では、この論文を拙稿(2001)と略称する。

(注2) 科学的論文には客観性の保証がなければならないことを長尾氏も次のように述べている。

「科学は誰にも理解され、科学的実験は誰がおこなっても同じ結果が再現できることが必須の条件であるといえるだろう。つまり、科学においては客観性が保証されねばならないわけである。そのためには、科学の論文はまちがいのない論理にしたがって議論と推論をおこない、観測や実験などによってその結果が実証できるものでなければならない。実験においては実験の材料は条件、そして実験の結果が正確に記述されて、誰もがこれを追試(追いかけて実験すること)できねばならないわけである」(長尾 真『「わかる」とは何か』岩波新書, 2001年, p.103)

(注3) この点について、内田詔夫氏は次のように指摘している。

「知覚や観察(経験)は、確かに知識の根拠ないし出発点として欠かせないものですが、対象が同じであればだれにとっても同じというわけではなく、必ず主体による意味づけを伴い、主体の持っている何らかの『理論(先入観的なものをも含めて)』に依存します。(中略)しかしそれにしても、理論の影響をまったく受けずに何らの意味づけも伴わない、『純粋な』知覚や観察をすることはできません。その意味で、(科学の発展段階、人の所属する文化、また生育環境が異なったりした場合のように)時代や場所や人が異なれば、『同じ』事物を眺め『同じ』事件に出会っても、『経験』され理解される内容は異なるかもしれない、ということに留意しておく必要があります。」(内田詔夫『人間理解の基礎』晃洋書房, 2002年, pp.40-41)

I. コフィ氏の質問が、なぜ私に対して「強烈なショック」となったのか

(1) 「原体験」の概要

この疑問を考察するためには、改めて「原体験」の概要を述べることから始めなければなりません。

これは既に拙稿(2001)のなかで説明したことですが、ガーナのココア生産農家の経済的実態を調査するために訪ねたコブリソ村で私は、村の広場に集まった50人ほどの村人たちを前にして、初対面の挨拶を兼ねて、次のように述べて調査に協力してくれるよう依頼しました。

すなわち、コブリソ村のココア栽培農家の経済状態を調べるために、これから一軒一軒の農家を訪ね、その家族全員の氏名から性別、年齢、学歴をはじめ、所有している農地の面積や栽培しているすべての作物について、その生産量から販売量、販売額はもとより、それらの作物の生産費にいたるまで、多種多様な項目について聞き取り調査したいので協力してもらいたい、というように述べました。

私の挨拶と説明が終わった直後に、それまでは静かに私の話を聞いていたコフィ氏が私に向かって、次のように質問してきたのです。

それは、「聞くところによれば、あなたは日本からガーナ大学へ留学してきた研究者であって、ガーナ政府の役人ではないということですが、政府の役人でもないあなたのような人が、なぜ、そのような内容の調査をしようとされるのですか？ あなたの調査の目的は何なのかを、私たち村人に説明していただけないでしょうか？」という内容の質問であった、と私は記憶しています。

コフィ氏の質問は、今からほぼ40年も前に受けたものであり、その時の私が文字どおり《虚を衝かれた》と感じるほど強烈なショックを受けたのは紛れもない事実だったとしても、その質問の内容を正確に記憶しているという客観的な論拠を示さなければ、読者諸賢に納得してもらうことはできません。その論拠は、のちに述べるとして、ここでは、その質問の「どの部分」に私が強烈なショックを感じたのかを改めて考えてみたい、と思います。

(2) 「強烈なショック」の実体・原因

先に私は、コフィ氏のこの質問が《虚を衝かれた》と思うほど強烈なショックを私に与えたと言いましたが、私たち人間が《虚を衝かれた》などと感じるのは、いったいどのような場合なのでしょう。私の推測によれば、それは、自分にとって予想外の出来事が発生したり、そのような出来事に遭遇したような場合に感じるのではないかと、思われます。

この推測がそれほど大きな間違いではないとしますと、当時の私が「コフィ氏は、私に対して、調査の目的を尋ねてくることは、ないだろう」と予想していたのではないのでしょうか。

この場合、重要なことは、それがあくまで自分の「不確かな予想」であるにもかかわらず、当時の私はそれが「不確かな予想にすぎない」という事実を意識しておらず、その事実が無意識であり無知であったのではないかと、ということなのです。

なぜ、そのような推測が成り立つのかと言え、私たちは、それが「不確かな予想にすぎない」ことを意識したり自覚していれば、たとえ予想外の出来事に遭遇したとしても、ただ単に「自分の予想が不確かだったから外れただけだ」とか、「自分の予想が間違っていただけだ」などと考えて、自ら容易に納得することができますから、その出来事から強烈なショックを受けることは少ないからです。つまり、私たちは、それが「不確かな予想にすぎない」ことを自覚しているかぎり、その結果として発生する出来事が予想外のことであったとしても、《虚を衝かれる》ほど強烈なショックを受けることはほとんどない、と言えるのではないのでしょうか。

そのように考えますと、コフィ氏の質問に対して私が《虚を衝かれた》と思うほど強烈なショックを感じたのが事実であるとすれば、当時の私はコフィ氏が「調査の目的を尋ねてくることはない」という自分の予想について、それが「不確かなものだ」などとは自覚しておらず、む

しろ逆に「彼は絶対に質問などしてこない」などというような確信（実際には、根拠のない妄信）を持っていた、という推測が成り立つのではないのでしょうか。

そこで次に問題となるのは、当時の私にはなぜ、自分の予想が「間違い易い不確かなものだ」などという自覚や意識がなかったのか、という疑問です。

この疑問を考える場合、コブリソ村での「原体験」そのものがひとつのヒントになるのではないのでしょうか。つまり、私の「原体験」がものがたっているように、自分の予想が大きく外れるような「苦い経験」を味わうことによって、はじめて私たちは実際に自分が「不確かな予想」をしていたにもかかわらず、それが「確実なもの」であるかのように妄信したり錯覚していたという間違いに気づくことができる、と言えるのではないのでしょうか。

このように考えますと、1962年にコブリソ村で「原体験」と呼べるような出来事に遭遇するまでの私には、自分の予想や推測が大きく外れるような「苦い経験」が無かったという推測が成り立ちますから、その推測それ自体が事実であるか否かを検証しなければならないこととなります。言い換えれば、それまでの私には「調査の目的」などを尋ねられることがなかった、と言えるか否かを考察しなければなりません。

(3) 「強烈なショック」の真相は何か

先に私は、1962年にガーナのコブリソ村で遭遇したような「調査の目的を尋ねられる」などといった経験が、それまでの自分には無かったのではないかと申しました。

そこで、改めて振り返ってみますと、次のような事実があることに気づくのです。

すなわち、学生時代の私は、大学の農学部で農村経済学科に在籍していましたが、そこでは必修科目として農村調査実習が課せられていました。そのため、私も同級生たちと同じように指導教官の指示に従って、神奈川県伊勢原市とか秦野市などの酪農家やタバコ栽培農家などを訪ねて、農村調査実習をしたことがあります。

その実習というのは、私たち学生が指導教官から割り当てられた数軒の農家を個別に訪問して、それぞれの農家の当主（世帯主）から次のような調査項目について聞き取り調査したうえで、それらのデータを調査票に記入していくというものでした。

私の記憶によれば、その時の調査項目には、当該農家の家族全員について、その氏名から性別、年齢、学歴をはじめとして、就学状況や就業形態はもとより、その農家が栽培したり所有している作物や家畜について、その種類から生産量とか販売量や販売額、さらには保有している農地の面積やその権利関係に至るまで、多種多様なものが含まれていました。

このようにプライバシーを侵害しかねないような項目まで調査しようとしていたにもかかわらず、農家の当主たちは、ほとんど誰ひとりとして「何の目的のために、このような調査をするのですか？」などと質問してくることはありませんでした。

大学を卒業したのち、私は世界の発展途上国（当時は「後進国」とか「低開発国」という呼び方が一般的でした）を調査研究するために設立されたばかりのアジア経済研究所に就職し、2年間の研修を終えたあと、研究所の海外派遣員として西アフリカのガーナ大学経済学部へ留学することになりました。留学するに当たって、私は「ガーナにおけるココア農業と経済発展」という研究テーマを策定し、このテーマで研究を進めるためガーナではココア栽培農家の経済調査をおこなう予定があることも研究会の場で説明しました^(註1)。

ところが、この研究会の席上でも、出席していた同僚の研究員たちはほとんど誰ひとりとして、

私の研究や調査の目的が何なのかを質問してくることがなかった、と記憶しています。

このように見てきますと、1962年にガーナのコプリソ村を訪ねるまでの私には、自分の調査や研究について、その目的が何なのかを質問されることがなかったことに改めて気づくのです。仮に、ガーナ大学へ留学するまでの私が自分の研究や調査の目的について質問を受けるという経験があれば、その時点で自分には明確な学問研究上の目的がないことを痛烈に意識したり自覚することができたはずですから、たとえコプリソ村でコフィ氏から質問されても、あれほどまでに強烈なショックを受けることもなかったのではないかと考えられるのです。

ここに至って、コフィ氏の質問がなぜ、《虚を衝かれた》と感じるほど強烈なショックを私に与えたのかという本当の理由が明らかになったのではないのでしょうか。それを敢えて一言でいえば、当時の私がコプリソ村の人びとの前で自ら「研究者である」と公言していながら、自分には調査・研究をおこなうための明確な学問上の目的がないことをコフィ氏の質問を通して痛烈に意識したり自覚せざるを得なかったという意味で、お粗末で恥ずかしい自分の姿に気づかされたことこそが、強烈なショックの真相であったと言うほかありません。

この事実は、それまでの私には、自分が調査や研究の内容について説明してもその目的が何であるかなどというような調査研究の前提について「質疑応答しない」のを常識としている社会のなかに置かれてきたのではないかと、という推定が成り立つのではないのでしょうか。

これもまた、私の非常に限られた経験にもとづいた推測にすぎませんから、普遍的で客観的な事実にもとづいて、私たち日本の研究者のあいだには研究や調査の前提とも言うべき目的について「質疑応答しない」のが常識となってきた、と言えるのか否かを検討しなければなりません。

(4) 公開の場での質疑応答を軽視する日本のアフリカ研究者

今の私から見れば実に驚くべきことですが、例えば私が過去40年間にわたって所属してきた日本アフリカ学会では、毎年一回、全国各地の大学を会場にした学術大会が開催され、毎回多数の研究発表がおこなわれますが、少なくとも私の知るかぎり、それらの研究や調査の前提となっている目的をめぐる質疑応答や議論がおこなわれた、という記憶がほとんどありません。

これは、あくまでも私の記憶によるものですから、間違いや錯覚の可能性があることを否定することはできません。そこで、私たち日本のアフリカ研究者が学術大会という「公開の場」で、調査や研究の前提である目的について質疑応答や議論をしてきたか否かを客観的な事実にもとづいて検討しなければなりません。私はその具体的な論拠のひとつとして、研究発表の時間制限を取りあげてみたい、と思います。

私の記憶によれば、日本アフリカ学会でおこなわれる個別の研究発表は質疑応答の時間を含めて、ほぼ15分程度に限られてきました^(註2)。しかし、多くの場合、研究発表だけで制限時間が終わってしまうか、時には制限時間を超えたために司会者(座長)が早く終了するようにベルを鳴らして注意を促しているにもかかわらず、なお発表を続ける場合も少なくありませんでしたから、この15分という制限時間内に質疑応答まで終えた研究発表は、非常に少なかったのではないかと思います。

このように質疑応答が制限時間内におこなわれなかった場合、司会者は「時間がありませんから、ひとつだけ質問を受け付けます」とか「質問できなかった人は、個別に直接、報告者に質問してください」などと言う場合が、少なくなかったと思います。

つまり、私の記憶によるかぎり、日本アフリカ学会の学術大会では、公開の場での質疑応答や

議論が非常に軽く扱われてきた、と言わざるを得ないのです。言い換えれば、そこでおこなわれる研究発表は、その多くが公開の場での質疑応答や議論を経ないまま、発表者の「一方的な」説明だけに終始してきたのではなかったか、と思います。

これは、発表される研究内容に関して、異論や批判的な意見などが存在するとか、その可能性が学術大会のような公開の場でおこなわれる質疑応答や議論を通して客観的事実として共有されることなく、非公開のまま「闇から闇へと葬られてきた」ことを意味している、とも言えるでしょう。それは、発表された研究内容とそれを構成する言葉や用語について、多様な解釈があり得ることや、自分とは異なった理解の仕方や考え方が存在するという事実を私たち日本のアフリカ研究者が共有する機会が著しく制限されており^(註3)、「なぜ、そのような解釈ができるのか？」などという疑問を感じるなどして、自分の考えを相対化するのに必要不可欠な機会や動機が制約されたり否定されてきたことを意味している、と考えることもできます。

この場合、一つの言葉や用語の解釈に対する疑問は、あくまでも自らの経験的事実にもとづく推測を通して自ずからいわば必然的に出てくるものであるとしますと、多様な解釈や理解の仕方があり得ることを知る機会が無いということは、私たち日本のアフリカ研究者が自分の経験的事実が持っている限界について無知のまま、つまり自分の個別特殊な経験を相対化することなく、あたかもそれが絶対普遍の解釈であるかのように錯覚したり妄信してしまう危険が非常に強いことを意味しているのではないのでしょうか。

その具体的な証拠のひとつとして、「コフィ氏は調査の目的を絶対に尋ねてくることはない」という私自身の妄信を挙げる事ができるでしょう。

そのように自分が妄信していたことを痛烈に意識させられる「苦い経験」を契機として、先に述べたような危険があることに気づくことができましたから、私は 2002 年度の日本アフリカ学会第 39 回学術大会において「アフリカ研究の今日的意義について考える」と題する報告をおこない学会の在り方を批判しました^(註4)。

この報告内容については、別の機会に論文として発表する予定ですが、ここではその内容の一部を述べたいと思います。

この学会発表で私は、赤坂 賢・日野舜也・宮本正興編『アフリカ研究：人・ことば・文化』（世界思想社、1993 年）に収録されている 5 編の論文を取りあげて、検討しました。

この結果、ある程度は予想していましたが、実に驚くべきことがわかりました。すなわち、ある研究者（仮に A 氏と呼んでおきます）は「歴史のなかの民族誌」と題する論文のなかで、次のように述べています。「独立後のスーダンや帝政と社会主義体制をへたエチオピアにおいては、ナイル上流部の民族集団は国家の体制のなかで、政治経済的にも文化的にも『周辺化』された存在になった。周辺化は、外部勢力との接触がはじまった段階から進行していたと考えられるが、その制度化が完成したのは現代の国家の枠組みのなかにおいてであろう。この状況下では、周辺化された民族集団が国家のコントロールする資源（たとえば教育と就職の機会、医療、そして外国からの援助など）にアプローチする機会は、きわめて限られている」（下線＝引用者、同上書、p.195）

このように A 氏は「国家がコントロールする資源」の例として、「教育」とか「就職の機会」や「医療」、さらには「外国からの援助」などを挙げていますが、この「コントロールする」という言葉を仮に「支配、管理、あるいは統制する」などという意味に解釈しても間違いではないとしますと、A 氏には「教育というものは国家が管理したり統制しているのだ」という考えや認

識が改めて理由を説明する必要のない常識として、いわば暗黙の前提となっている、と言ってもよいでしょう。

確かにA氏の言う「教育」という言葉を学校教育（あるいは、学校でおこなわれる教育というよう）に限定して使うならば、そこでの教育が国家の管理や統制を受けていると言っても間違いではないでしょう。しかし、子供が家事や農作業などを「手伝う」ことを通して経験的に学び身につける知恵も「教育や訓練」の産物であるとしますと、教育には国家や政府の統制や管理とは無関係におこなわれるものがあると考えられますから、A氏のように「教育は国家がコントロールしている」などとは言えないのではないのでしょうか。

このように考えますと、「教育」だけでなく「就職の機会」とか「医療」などといった言葉や用語についても、この論文の筆者であるA氏が具体的にどのような意味を込めて、これらの言葉を用いているのか、その暗黙の前提について疑問がでてくるのです。例えば、「医療」という場合、アフリカに限らず、世界各地の人間社会では国家が公式に認定する資格や医師免許を持たない人物（しばしば「伝統医」とか「呪術師」などと呼ばれます）が薬草などの民間医薬を用いておこなう「民間療法」などと呼ばれる「医療」があることは広く知られていますが、このような民間療法とか民間医術もまたひとつの「医療」に違いないとしますと、国家のコントロールが及ばない医療が存在することになるのではないのでしょうか。

それでは、京都大学の大学院を修了するほどきわめて高い学歴と豊富な学識を持っているA氏ほどの人物が、なぜ、これほど単純な間違いを犯してしまうのでしょうか。

これは、あくまで私の単なる想像に過ぎませんが、原因のひとつはA氏が自分の受けてきた学校教育こそが教育であり、学校以外でおこなわれるものは教育とは呼ぶに値しないものだと考えているためではないのでしょうか。さらに言えば、A氏は「学校教育とは何か」などという問題を考えたこともなかったのではないかと、ということです。

なぜなら、「学校教育とは何か？」などと考えるということは、言うまでもなく、その前提として自分が受けている（あるいは、受けたことのある）学校教育に疑問を感じなければなりませんし、それは、学校に通学することが「辛くて、苦しい」という経験によってはじめて出てくる学校教育に対する根底的な疑問ではないかと、思われるからです。

その意味で、A氏が用いた「教育」という言葉には、この言葉を幅広く解釈するために欠くことのできない学校教育にまつわる「苦い経験」が無かったのではないかと、という推測が成り立つように思われるのです。そのため、A氏には教育という言葉进行深入の必要や契機がなく、この言葉を「学校教育」などというように具体的に限定しないで、いわば「安易に使う」ほかなかったのではないのでしょうか。

ここで取りあげたのは、きわめて限られたひとつの事例にすぎませんが、この例を見ても容易にわかるように、抽象的な言葉や用語を具体的に解釈するためには、その言葉にまつわる「苦い経験」が言葉の意味を限定的に解釈するための具体的論拠として必要になるのではないのでしょうか。

しかし、私たちが用いる言葉や用語はほとんど無数に存在しており、そのすべての言葉について「苦い経験」をすることは不可能ですから、私たちは具体的な経験にもとづいて解釈しないまま（つまり、具体的な意味を知らないまま）言葉を使わざるを得ないのではないのでしょうか。

これが事実だとしますと、私たちが抽象的な言葉を具体的に解釈するのに必要な「苦い経験」を欠いたまま抽象的に言葉を使う場合には、断定的な表現を意識的に注意深く避けるという慎重

な配慮が必要だということになるでしょう。

そのように、抽象的な言葉に対する配慮や慎重さは、「苦い経験」という具体的な根拠に欠けていることを第三者からの質問によって気づくことがなければ生まれるものではありませんから、抽象的な専門用語（学術用語とも呼ばれる）を使わざるを得ない私たち研究者にとって、第三者との質疑応答が必要にして不可欠なものだということを容易に理解し、納得することができるのではないのでしょうか。

（注 1）アジア経済研究所では、すべての海外派遣員に対して、留学する直前に定例の研究会において研究計画を説明することが義務づけられていた。なお、毎週水曜日の午後おこなわれるこの研究会には、研究所の所長や理事などの役員をはじめ、先輩や同僚の研究者が毎回 15～20 人以上出席するのが恒例であった。

（注 2）毎年発刊される『日本アフリカ学会 学術大会・研究発表要旨』に掲載されているプログラムを見れば、個別の研究発表が 15 分という時間内でおこなわれることが明記されている。

（注 3）日本を代表する水俣病研究者のひとりである原田正純氏は、昭和 47 年 6 月にスウェーデンの首都ストックホルムで開催された民間の国際環境会議に参加した時の感想を述べるなかで、医学者の学会でも討論不在であることを次のように指摘している。

「ストックホルムではいろんな人に会った。学者あり、市民あり、学生あり。私の不十分な語学力ではとても水俣病の医学的な実態を全部話すことはできなかった。しかし、相手が本当に解ろうとして接してくるとき、言語を越えた意志の通じ合いを感じた。（中略）形式的な学会、討論不在の学会に慣れていた私にとって、この自由で形式にこだわらない環境広場における集会や討論会は実に魅力的であった。」（原田正純『水俣病』岩波新書、1996 年、p.221、下線＝引用者）

（注 4）『第 39 回日本アフリカ学会 学術大会・研究発表要旨』（p.v, p.57）

II. コフィ氏の質問は、客観的な事実であったと言えるのか

この疑問は、当時のコフィ氏には「調査の目的」を私に尋ねなければならない客観的な必然性があったと言えるのか、というようにも言い換えることができます。そこで、この疑問を検討するためには、コフィ氏の質問の内容を改めて考察しなければなりません。

まず最初に、コフィ氏の質問を再現してみますと、彼は私に対して「聞くところによれば、あなたは日本からガーナ大学へ留学してきた研究者であって、ガーナ政府の役人ではないということですが、政府の役人でもないあなたのような人が、なぜ、そのような内容の調査をしようとされるのですか？ あなたの調査の目的が何なのかを、私たち村人に説明していただけないのでしょうか？」という主旨の質問をしてきたのでした。

ここでコフィ氏が私に尋ねたことは、言うまでもなく、私の調査目的は何かという点です。そのように、コフィ氏が私の調査目的を尋ねたのが事実であるとしめると、当時のコフィ氏には私の説明を聞いても目的が何であるか理解することができなかったことを意味していますから、彼が「私の調査目的を理解することができなかった」のが客観的な事実であることを検証しなければなりません。

それでは、コフィ氏は本当に私の調査目的を理解していなかった、と言えるのでしょうか。この疑問を解明するためのヒントとして、「ガーナ政府の役人ではないということですが、政府の役人でもないあなたのような人が、なぜ、そのような内容の調査をしようとされるのですか？」というコフィ氏の言葉に注目したいと思います。

この問いかけの言葉は、「あなた（私＝細見）がガーナ政府の役人であるというのであれば、調査の目的が何であるか、私（＝コフィ氏）にはわかっています。しかし、あなたは、政府の役人ではなくガーナ大学の研究者だということですから、なぜ、あなたのような大学の研究者が政府の役人と同じような内容の調査をするのか、あなたには学問研究上の目的があると思うのですが、その目的が私には理解できないのです」というように言い換えることができるのではないのでしょうか。

仮に、このような言い換えや解釈が間違いでないとしますと、次のような疑問が出てきます。その疑問というのは、当時のコフィ氏にはガーナ政府の役人がおこなった調査について、その目的を知る機会があったと言えるのか、ということです。これを、もう少し厳密に言えば、私がコフィ氏と出会った1962年11月の時点で、既にコフィ氏には私と同じような内容の調査をするためにコブリソ村にやって来た政府の役人と会話を交わすなどして、その調査の目的を尋ねることができるような機会があったと推測することが可能なのか、という問題です。

さらに、そのような機会がコフィ氏にはあったと推測する場合、その根拠は何なのか、という点についても検証しなければなりません。

これらの疑問や問題点を検証するためには、当時の私がどのような項目について調査しようとしていたのかを確認しておくことが必要だと思います。そこで明らかになったことは、私がコブリソ村で調査しようとしていた項目には、農家の家族全員について、その氏名から年齢、性別、学歴、就学状況、就業形態などが含まれていましたが、これらの調査項目はガーナ政府が全国規模で実施してきた「人口センサス」(Population Census)の調査項目と基本的には同じものであった^(註1)、という事実です。

この事実は、コフィ氏が私の調査内容（または、調査項目）の説明を聞いたとき、その調査項目が政府の役人（つまり、「人口センサス」の調査員）がコブリソ村で調査した項目とほとんど「同じだ」と受け取った可能性が高いことを推測する根拠になるでしょう。

そこで、次に問題となるのは、実際にいつの時点でコフィ氏が「人口センサス」の調査員(enumerator)と出会ったのか、という点です。ガーナ政府が実施してきた「人口センサス」の時期を調べてみますと、独立後のガーナで最初に「人口センサス」が実施されたのは1960年であったことがわかります。

これらの事実から、私たちは、コフィ氏が「人口センサス」の項目を調査するためにコブリソ村を訪ねてきた調査員と直接、出会うことができたのは1960年であった、と推測しても間違いのないと思われます。しかし、この推測が間違いのない言うためには、さまざまな条件や可能性を考慮しなければなりません。そのなかでも特に重要なことは、この時の「人口センサス」では、どのような調査方法が採られていたのか、という問題です。

なぜ、「人口センサス」の調査方法が問題なのかと言えば、たとえば日本の『国勢調査』のように、あらかじめ各家庭に配布されている「調査票」に世帯主が自分でデータを記入し、その「調査票」を国勢調査の調査員が回収するという調査方法であれば、世帯主が調査員と直接会って「会話する」必要はありませんから、調査員と世帯主が会話を交わす機会は非常に少ない、と考えられるからです。

そこで、コフィ氏が「人口センサス」の調査員と直接、出会って「質問する」ことができたか否かを考えるためには、ガーナ政府が実施した「1960年人口センサス」で採用されていた調査方法がどのようなものであったかを確認しなければなりません。

この点について、結論的に言えば残念ながら、「1960年人口センサス」において採用された調査方法がどのようなものであったのかを確認することはできませんでした。しかし、念のために「1984年人口センサス」の『予備報告書』(Ghana, 1984 Population Census of Ghana: Preliminary Report)を見ますと^(註2)、少なくとも「1984年人口センサス」の場合には、個々の調査員が割り当てられた調査地区(Enumeration Area)内にある家庭を一軒ずつ訪問し、その世帯主に直接インタビューしながら聞き取ったデータを調査員自身が「調査票」(Questionnaire)に記入する「面接調査方式」(canvasser method)が採られていたことがわかります。

なぜ、日本の『国勢調査』のように世帯主が「調査票」へ記入する方法ではなく「面接調査方式」が採られていたのかを考えてみますと、当時のガーナでは成人の識字率(adult literacy rate)が日本などとは比較にならないほど低い水準にあり、世帯主が自分で「調査票」にデータを記入することが困難だったのではないかと、という事情が想定されるのです。

言うまでもなく、この面接調査方式が「1960年人口センサス」の場合にも採用されたという確証はありません。しかし、たとえば1970年当時のガーナにおいて、成人の識字率が全国平均で30%程度であったという統計数値がほぼ間違いのないものとしますと^(註3)、それより10年前の1960年当時、その識字率が70年の識字率(ほぼ30%)を超えていたと推定するには無理があります。したがって、1960年当時のガーナでは成人の7割ないし、それ以上が公用語である英語の読み書き能力(識字能力)を持たない「文盲」(illiterate)であったと推定しても、それほど不自然ではないでしょう。

しかし、問題はそれほど単純ではありません。なぜなら、ここで引用した識字率の統計数値は、あくまで「成人の全国平均」であって、英語の読み書きを学ぶのに必要な学校や識字教室あるいは成人学級などの教育施設の普及が遅れていたコブリソ村のような農村部では、その普及と整備が進んでいた都市部に比べると成人の識字率が相対的に低かった、と推定できるからです。

事実、私が1962年にコブリソ村を訪ねて、聞き取り調査を実施するのに必要な英語の通訳を探したところ、村にある小学校の教員のほかにはジェンフィ氏(Mr. Jenfi)という青年しか通訳できる成人が見当たらなかったのです。

このような状況のもとで、農家の世帯主が自分自身で「調査票」に記入する方式を採れば、英語の識字者であるジェンフィ氏の他に村人の中には誰も「調査票」を完成することのできる者はいなかったのではないのでしょうか。

その意味でも、1960年当時のコブリソ村のように成人の大多数が英語の識字者ではない状況のもとで「人口センサス」を実施しようとするれば、調査員のような英語の識字者^(註4)が世帯主から聞き取ったデータを「調査票」に記入する「面接調査方式」を採る以外になかったと推定できますから、「1960年人口センサス」も84年の場合と同じように「面接調査方式」が採用されていた、と考えてもよいのではないのでしょうか。

このような推測が誤りではないとすれば、「1960年人口センサス」調査のためにコブリソ村を訪ねてきた調査員とコフィ氏が直接、出会うことができたであろうと推定することができます。

(1) コフィ氏は「人口センサス」の調査目的を知ることができたと言えるのか

これまでに述べてきたところから、1962年にコブリソ村を訪ねた私に対してコフィ氏が質問した言葉の含意、すなわち「ガーナ政府の役人(人口センサスの調査員)が、家族全員の氏名から年齢、性別、学歴などといった項目について調査するというのであれば、自分(コフィ氏)に

は既に、その調査目的がわかっています」という私の解釈を具体的に論証する手がかりが得られたのではないかと、思います。

つまり、1962年の時点で「コフィ氏が既に調査員の調査目的を知っていた」という私の解釈が単なる推測ではなく客観的事実であると言うためには、コフィ氏がその調査員に対して「調査の目的は何なのか」と質問するなどして、その目的を知ることができたことを具体的な論拠を挙げて論証しなければならないのです。

この問題を論証するためには、「調査の目的は何なのか」というコフィ氏の質問それ自体を具体的な疑問にすることが必要になります。そこで、再び「1960年人口センサス」の調査項目を見てみますと、家族全員の氏名から性別、年齢、学歴などというように多種多様な項目があることがわかります。そのなかから、とりあえず「年齢」という項目を取りあげ、コフィ氏が政府の役人である調査員に向かって「なぜ、私たちコプリソ村の住民の年齢を調査するのですか？ その目的を説明していただけませんか？」などと質問する必然性があったと言えるか否かを検討したいと思います。

この場合、調査員が住民の「年齢を調査する」と言えば、読者諸賢は、調査員が世帯主からその家族成員の生年月日を聞き出すなどして、そのデータ（年齢）を「調査票」に記入することだと想像されるかもしれません。ところが、ガーナ政府が公刊した「1960年人口センサス」の『調査報告書』を見ますと、この「年齢」というデータは、すべてがそうだとは言えないにしても、面接調査（調査員とのインタビュー）を通して世帯主が調査員に申告した年齢ではなく、村の村長や長老がその地域の歴史的出来事（例えば、先代村長の葬儀とか、現村長の就任式など）があった年次を基準にして推定した年齢であったり、住民の頭髮や皮膚といった身体の状態を調査員が観察して、白髪の「混じり具合」とか皮膚の「たるみ具合」などから推定した年齢であって、いわば第三者の記憶や推測にもとづいた年齢であることがわかるのです^(註5)。

年齢というデータが、このような方法によって収集されていたのが事実であるとしみますと、ガーナの住民がその年齢や生年月日というものを正確かつ厳密に記録したり記憶する必要性を感じてこなかったのではないかと、という推測が成り立つのではないのでしょうか。

事実、1970年におこなわれた「人口センサス」の場合でも、世帯主の多くは調査員に対して、自分自身の年齢や家族の年齢を「知らない」とか「記憶にない」などと回答したことが報告されています^(註6)。

さらに、この推測を裏付けるデータが、ガーナ政府が公刊してきた学校教育に関する統計資料にも見られます。例えば、1965年と76年にガーナ政府の中央統計局が公表した『教育統計』(Educational Statistics)と見ますと^(註7)、少なくとも1960年代と70年代のガーナでは、義務教育の開始年齢として6歳という年齢が政府によって公式に規定されているにもかかわらず、実際に小学校に就学した新入生の年齢は5歳から10歳以上にまで広く分散していたことがわかります。これが事実だとしみますと、ガーナの住民たちは、自分の子弟を小学校に就学させるか否かを判断する場合、政府が公式に規定している6歳という年齢を基準にしてはこなかった、と推定することができるのではないのでしょうか。

少なくともこれまで考察してきたところから、ガーナの人びとのあいだでは、もちろん例外はあるとしても、自分たちの年齢や生年月日を正確かつ厳密に記憶したり記録することが必要だとか重要だなどとする「考え方」（つまり、「年齢観」）が非常に希薄であったか、そのような「考え方」がほとんど存在しなかったと言ってもよいのではないのでしょうか。

仮に、そのような推測が成り立つとすれば、1960年に「人口センサス」のデータを収集するためにコブリソ村を訪ねてきた政府の調査員が、村人たちすべてについて、その正確な「年齢」を聞き取ろうとする態度を見たコフィ氏たち村人が「なぜ、われわれの正確な年齢や生年月日を知る必要があるのだろうか?」というような疑問を感じ、調査員に対して調査の目的を質問したとしても決して不思議なことではありません。

(2) コフィ氏には質問する必然性があったと言えるのか

次に確かめなければならない点は、果たしてコフィ氏には「人口センサス」の調査員に年齢を調査する目的を尋ねなければならない必然性または明確な動機があった、と言えるか否かです。この問題を考える場合、私たちはコフィ氏がコブリソ村の村長代理であったという事実を、改めて想起する必要があります。なぜなら、調査員が村人たちの年齢や生年月日を調査する場合、既に述べたように、村長や長老などに尋ねるのが一般的な方法であったとされていますから、「1960年人口センサス」がおこなわれた当時、コフィ氏がコブリソ村の村長代理であったとしますと、調査員から「あの家の息子の年齢は何歳なのか?」とか「あの家の娘の年齢は何歳なのか?」などというように、ほとんど同じ内容の質問を繰り返して執拗に受けたであろうことが推測できるからです。

そのように、自分が必要だなどと考えたり、それを意識したこともなかった年齢や生年月日について、同じこと(質問)を繰り返して尋ねられると私たちは誰でも、その「執拗さ」を異様に感じるのが普通ですから、村長代理であったコフィ氏が「それほどまでして、村人たちの年齢を知ることが、なぜ、ガーナ政府にとって必要なのだろうか?」などという疑問をほかの村人たちよりも一層強烈に感じたとしても不思議ではありません。

ここに至ってようやく、私たちはコフィ氏が「1960年人口センサス」のためにコブリソ村を訪れた調査員に対して「政府の役人であるあなたは、何の目的で私たち村人の年齢や生年月日を調査しようとするのですか?」などという主旨の質問を投げかけたであろう、と推測できる論拠を示すことができました。

(3) コフィ氏が質問したのは客観的事実であったと言えるのか

問題は、コフィ氏の質問がコフィ氏と調査員とだけの間でいわば「非公開」に私的または個人的な質問として出されたものなのか、それとも、多数の村人たちが見守っている「公開の場」でおこなわれた客観的事実であったか否かという点ですが、結論的に言えば、この質問は公開の場でおこなわれた客観的事実だったのではないかと私には推測できるのです。

なぜ、そのように推測することができるのかと言えば、これまで述べてきたところからも明らかのように、年齢や生年月日を記憶したり記録することが必要ではないとする「考え方」ないし「年齢観」は、コフィ氏だけが持っていた特殊なものではなく、村人たちすべてに共有されてきた「考え方」ではないかと思われるからです。つまり、年齢というものは特別に意識して記憶したり記録しなければならないほど重要なものではないなどという「年齢観」が村人たちの常識であったとしますと、年齢を執拗に聞き出したり調査しようとする調査員の態度や言動は、村人たちから見れば「非常識」で「異様」な言動だというように受け取られる可能性が強いと考えられます。その結果、村人たちが調査員に対して謂われのない不信感(不審感)を持ったり、場合によっては、調査に協力しない者も出てくる可能性がありますから、村人たちの不信感を少しでも

解消することによって、調査員を快く受け入れ「人口センサス」に協力する雰囲気をつくるためにも、また自分自身の疑問を解消するうえでも、村長代理という立場にあったコフィ氏には多数の村人たちが見守っている「公開の場」で調査の目的が何なのかを質問することによって村人たちの不信感を払拭することこそが必要だったのではないかと推測することができるのです。

(注1) Ghana, 1960 Population Census of Ghana: Special Report 'A', Census Office, Accra, 1964 の調査項目を参照。

(注2) Ghana, 1984 Population Census of Ghana: Preliminary Report, Central Bureau of Statistics, Accra, 1984, p.19

(注3) The World Bank, Ghana: Policies and Program for Adjustment, World Bank Country Study, Washington, 1984, p.xiii

(注4) 少なくとも「1984年人口センサス」の場合には、小・中学校の教員や地方自治体の官吏などのような知識人が調査員として登用されたのである (Ghana, 1984 Population Census of Ghana: Preliminary Report, *ibid.*, p.17)。

(注5) Ghana, 1960 Population Census of Ghana: Special Report 'A', *ibid.*, pp.viii-x

Republic of Ghana, 1970 Population Census of Ghana Volume II: Statistics of Localities and Enumeration Areas, Census Office, Accra, 1972, pp.xvi-xix

(注6) 1970 Population Census of Ghana Volume II, *op. cit.*, pp.xviii-xix

Kodwo Ewusi, Planning for the Neglected Rural Poor in Ghana, University of Ghana, Legon, 1978, p. 24

(注7) Republic of Ghana, Educational Statistics 1962-63: Primary and Middle Schools, Central Bureau of Statistics, Accra, 1965, p.77, pp.84-85

——, Educational Statistics 1972-73: Primary and Middle Schools, Central Bureau of Statistics, Accra, 1976, p.30, pp.36-37

結びにかえて

本稿では、ガーナのコブリソ村で遭遇した「原体験」を取りあげ、①コフィ氏の質問によって私が感じた「強烈なショック」と、②コフィ氏が質問したという2つの主観的で個別特殊な経験的事実について、それが普遍性をもった客観的事実であることを論証するようこころみてきました。

その結果、「原体験」に遭遇するまでの私には「調査研究の目的」を公開の場で問われたという経験がなく、調査研究の目的を「問わない」のを常識と見なすような社会に生きてきたのではないかということを明らかにしました。他方、コフィ氏の質問がコブリソ村の人々が見守る公開の場で私に投げかけられた客観的事実であったことを推論によって示すことにより、少なくとも1962年当時のコブリソ村の人々のあいだには「調査研究の目的」を公開の場で問うことが常識であるかのように見なされていたのではないかと、ということも明らかにしてきました。

これが事実であるとしめすと、①コブリソ村の人々は、専門の研究者ではなく、まったくの「素人」であるにもかかわらず、なぜ「調査研究の目的」を問うことを当然の常識であるかのように考えてきたのか、という疑問と②私たち日本の研究者は、なぜ、互いに調査研究の目的を問わないことを当然の常識であるかのように見なしてきたのか、という2つの疑問に当面せざるを

得ないのです。

そこで、改めて「調査研究の目的」を問うことが何を意味するのかを考えますと、それは当事者である研究者が何にもとづいて調査研究の結果（成果）を予測しているのかという、予測の根拠や論拠を問うことであると考えられます。なぜなら、調査研究の目的とは、調査研究するという行為によって、どのような結果（成果）が得られるかを当の研究者自身が予測したり推測したものにはかなりませんが、その予測それ自身が客観的で普遍的な論拠にもとづいたものであるという保証がなければ科学的な成果にはなり得ない、と考えられるからです。

しかも、専門の研究者でもなく「素人」であるはずのコブリソ村の人々が「調査研究の目的」を問うことを常識であるかのように考えてきたのが事実であるとしみますと、専門の研究者を含めたすべての人間には、客観的で普遍的な論拠を欠いたまま、いわば独善的に物事を誤って予測するという弱点があることに気づいており、彼らにはそのような人間観があった、と言っても過言ではないでしょう。

それが事実であることは、コフィ氏から調査の目的を尋ねられるまでの私が学生時代の農村調査実習とかアジア経済研究の研究会などといった非常に限られた「経験的知識」だけをガーナのコブリソ村においても通用する普遍的な根拠であるかのように錯覚したり妄信して、「コフィ氏が調査の目的を尋ねてくることは絶対にありえない」というように独善的で独りよがりな予測をしていた（あるいは、そのような予断をもって行動していた）ことが「苦い経験」の原因となったことを見れば明らかでしょう。